

## 言語類型の循環的階層性

### The Cyclic Hierarchy of the Language Typology

鈴木 互  
Wataru SUZUKI

#### 0 はじめに

世界の言語を単純な構造で記述したいというのが言語学の夢である。本稿は、言語の統語的な連続性（傾斜）と、モダリティーとその呼応要素からなる語用論的な4階層とで構成される「言語の循環的階層性」というモデルを提案する。そして「言語の循環的階層性」に基づく4つのスイッチを諸言語の語順に適応して、世界の言語を連続的に分類できること、すなわち「言語類型に循環的階層性があること」を示したい。

#### 0:1 予備的考察

角田（1991）などに基づいて111の言語の文型を観察すると、その相互的な分布は次のようなものである。（ ）内は言語の数。

##### (1) 文型の分布

VOS/VSO タガログ語 (5)	VOS ケクチ語 (5)		
VSO ウエールズ語 (10)			OSV (0)
VSO/SVO ギリシャ語 (5)			OSV/SOV ナバホ語 (2)
SVO 英語 (33)	SVO/VSO パラウ語 (5)	SVO/SOV ジャル語 (3)	SOV 日本語 (41)
		OVS ヒシカリャナ語 (1)	SOV/OVS アパライ語 (1)

これは、郡司（1994:20）などに示されている3大文型の量的な傾きと一致

している。

(2) SOV > SVO > VSO

## 0:2 操作子と被操作子

グリーンバードとレーマン、フェネマンらの業績を踏まえて、コムリー(1989:1992:101-106)は、OV型言語とVO型言語の文型に対応する「操作子と被操作子の対称性」を示している。

(3) OV型:操作子+被操作子、VO型:被操作子+操作子

操作子と被操作子の具体的な文法要素は以下の通りである。(表記は改めている)

(4) (操作子:被操作子) = (目的語:動詞) (形容詞:名詞) (属格:名詞) (関係節:名詞) (名詞句:接置詞) (比較の基準:比較形容詞)

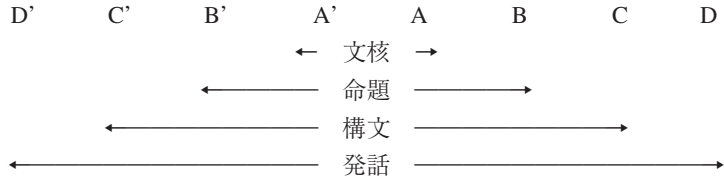
これは、大津(1995:30)が、「各言語の文法でXバーのスキーマを具現化するとき、主要部=ヘッドのある方向が右か左に決まっている」というように、生成文法でいうXバー理論のヘッド・パラメーターの相違に当たっている。また、郡司(1994:22)が示しているように、主辞駆動句構造文法(HPSG)でいう、「主辞先行言語:英語、主辞後続言語:日本語」に対応している。以上から、OV型言語の特徴とVO型言語の特徴は位相的には逆転している、と仮定することができる。

しかしながら、OV型言語とVO型言語の区別は、述語(動詞など)と目的語(名詞など)の関係を述べたもので、その他の操作子と被操作子の関係が述語と目的語の関係と完全に対応しているわけではない。したがって操作子と被操作子の関係をそのまま言語の分類に適用するわけにはいかない。言語を分類するのに適した基準は無いであろうか。

## 1 言語の循環的階層性

鈴木(1998a)では、南(1993:52、96-97)の従属句による成分と要素の分類を、「統語論的形態の傾斜」として横軸にとり、中右(1994:15)のモダリティー論から着想した階層(「文核」「命題」「センテンス・モダリティー(以下SMと省略する)」「ディスコース・モダリティー(以下DMと省略する)」)を、語用論的機能(あるいは語用論的意味)の階層として縦軸にとり、次のような統語論的語用論的な階層を提案した。

(5) 統語論的語用論的階層



これを日本語に即して適応し、発話順に直すと次のようになる。

(6) 日本語の統語論的語用論的階層

	D'	C'	B'	A'	A	B	C	D
I 文核				目的語	命令			
II 命題			主語	目的語	連用	アスペクト		
III 構文		主題	副詞	目的語	ボイス	テンス1	ムード1	
IV 発話	独立語	副詞	疑問	疑問	疑問	テンス2	ムード2	疑問印

さらに階層内の連続性は循環的な特徴を表していて、それを反映させて、図示すると次のようになる。

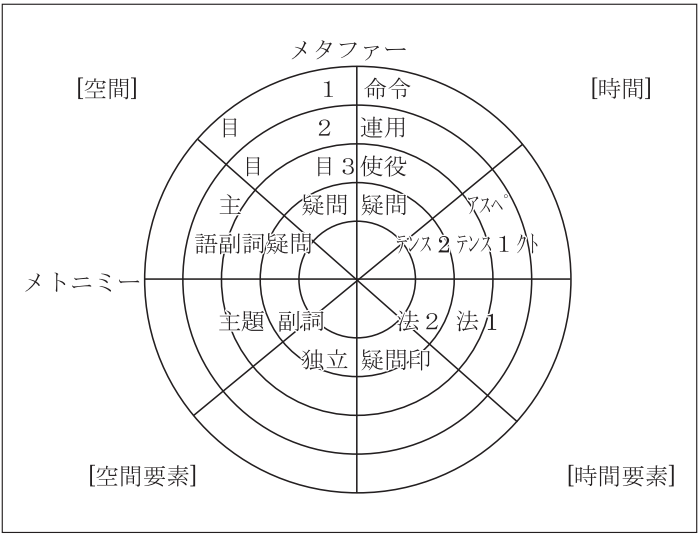


図1 言語の循環的階層性（日本語）

## 1:1 認知的シェーマ

鈴木（1996）（1997a）（1997b）（1998b）などによれば、日本語の名詞・格助詞・補語・述語・発話には、循環的階層性があり、次のような「認知的シェーマ」の反映と考えることができる。また、鈴木（1998a）によれば、「言語の循環的階層性」も「認知的シェーマ」の反映と考えることができる（図1参照）。

（7）認知的シェーマ

	（メトニミー）	
	（全体）	（部分）
	（具体）空間	空間要素
（メタファー）	<hr/>	
	（抽象）時間	時間要素

## 2:0 言語の新しい分類基準

1に示したように、日本語は統語的な語順（D' C' B' A' ABCD）に従い、英語は語用論的＝意味的な語順（IV III II I）に従っている。その他の傾向の言語はこれらの中間に分布すると考えられる。したがって言語の循環的階層性に基づいて言語の語順について考察すると、次のような4つのスイッチを考えることができる。

1) 文核のスイッチ、2) 命題のスイッチ、3) SMのスイッチ、4) DMのスイッチ

1)を除けば、下位の文法要素と上位の文法要素の接続の仕方のスイッチである。したがって、それぞれについて統語型か意味型かに分類することができる。各スイッチについて統語型を（+）、意味型を（-）とすると、典型的に統語型の場合（日本語）、すべてのスイッチが統語型（+）で、典型的に意味型の場合（英語）、すべてのスイッチが意味型（-）になり、その間に中間型が想定される。

また、言語の分類に当たって、典型的な統語型言語である日本語を基準にする。日本語を基準とする理由としては、1) VO型言語でもWH疑問文で疑問詞（Oに相当する）が先行し疑問の印（V）が後続すること、2) VO型言語でも述語の屈折語尾が後ろに来ること＝OV型言語の名残とみなせること、3) 比較的古い言語であるサンスクリット語やラテン語がOV型言語の特徴を備えていること、等である。

各スイッチの具体的な内容は、以下のように考えることができる。

## 1) 文核のスイッチ

OV 型言語は統語型とする。したがって、VO 型言語は意味型とする。

## 2) 命題のスイッチ

[S [OV] V'] のように架橋型となるものは統語型とする。[SV'] [VO] のように接続型となるものは意味型とする。基本的な文型と VV' の接続で明らかになる。助動詞として分離していない場合（タガログ語・インドネシア語など）は、接辞の位置で決める。

## 3) SM のスイッチ

命題が関係節となって修飾する時に、日本語のように前から修飾する場合は、主文の構造に関係節が繰り込まれていると見なせるので統語型とし、後ろから修飾する場合は、主文のあとに関係節が接続すると見なせるので意味型とする。以上は名詞（句）に対する修飾である。次に述語（動詞・形容詞）に対する修飾としては、単純疑問文の作り方で区別することができる。疑問の印は、命題についての疑問を作ることができるので、SM の機能と DM の機能を兼務すると考えることができる。したがって、疑問の印が後置されれば、統語型、文頭に置かれれば、意味型とみなすことができる。両者が一致しない時には中間型とみなす（たとえばタイ語など）。

## 4) DM のスイッチ

WH 疑問文の疑問詞の位置が平叙文式（平と略記する）であれば、この階層でも統語型とみなすことができる。文頭に置かれれば（頭と略記する）、この階層が先行するので意味型と判断される。疑問の印も DM のスイッチと考えることができるが、疑問詞が存在すると欠落する現象が観察される（タイ語、中国語、インドネシア語など）ので、統一的な分類には不向きである。

以上の1) から4) のスイッチを機械的にあてはめれば、2の4乗すなわち16の言語に類型化できることになる。

## 2:1 諸言語の特徴分析

角田（1991）の資料を参考にして、さらに検討を加えると、主な言語の特徴として、次のような結果を得る。

(8) 諸言語の分析 (1)

	文核	文核	命題要素	命題要素	命題	SM	SM	SM	DM
	O・V	N・P	VV'	否定	SOVV'	R・N	比較	QM	WHQM
角田の分類	1	2	10	17	1+10	7	9	13	15
ニホンゴ	+ SOV	+	+	+ V 後	+ SOVV'	+	+	+ 末	+ 平
トルコゴ	+ SOV	+	+	+ V 語尾	+ SOVV'	+	+	+ 焦点後	+ - 平・頭
中国ゴ	- SVO	-	+ -	+ -	+ SVOV'	+	+	+ - 末	+ 平
タイゴ	- SOV	-	+	+ -	+ SVOV'	-	-	+	+
インドネシアゴ	- SVO	-	-	- V 前	- SV'VO	-	-	-	- 文頭
タガログゴ	- VOS	-	- V' ナシ	- 頭・前	+ V'VOS	-	-	-	- 文頭
ウエールズゴ	- VSO	-	-	- V 前	- V'SVO	-	-	- 文頭	- 文頭
フランスゴ	- SVO	-	-	- V 前	- SV'VO	-	-	-	-
英語	- SVO	-	-	- +	- SV'VO	-	-	- 文頭	- 文頭
ドイツゴ (主)	- + SVO	-	-	- +	- SV'OV	-	-	- ナシ	-
ドイツゴ (従)	+ SOV	-	-	- +	+ SOVV'	-	-	- ナシ	-
ハンガリーゴ	+ SOV	+	+ -	- V 前	+ SOVV'	- +	- + ?	+ V 後	- 文頭

これから、次のような相関的な対応関係を読み取ることができる。

(9) 4つのスイッチと文法的関係

	統語型	意味型
文核のスイッチ	OV 型・NP (後置詞型)	VO 型・PN (前置詞型)
命題のスイッチ	架橋型: S [OV] V' など 動詞 + 否定	後置型: SV' [VO] など 否定 + 動詞
SM のスイッチ	RN 型・比較の基準前置 疑問の印後置	NR 型・比較の基準後置 疑問の印前置
DM のスイッチ	WH 疑問詞平叙文式	WH 疑問詞前置

この結果は、コムリーらの判断と異なり、操作子と被操作子の関係は、OV 型か VO 型のみに依存するのではなく、言語の各階層間の語順に応じている

ことを示している。ここで、V' については、多様で中国語などでゆれる場合があるので、そのうちでもっとも基本的なもの、すなわち完了のアスペクトをあらわすもの、たとえば日本語「た」英語「have」などを考えたい。したがって、中国語については、「了」の位置（「我愛他了」）から、SVOV' 型とみなす。

そこで、少数の言語の型についても同様の分類を試みる。（資料は角田（1991）による）

(10) 諸言語の分析 (2)

	文核	文核	命題要素	命題要素	命題	SM	SM	SM	DM
	O・V	N・P	VV'	否定	命題	R・N	比較	QM	WHQM
ナバホゴ	+ SOV OSV	+	+ ?	+ - 文中文末 ?	+ SOVV' - OSVV'	- 他	+	- 文頭 2番目 文頭 + 3番目	+ ? 平 ?
アバライゴ	+ OVS SOV	+	+	+ 動詞語尾 など	- OVV'S + SOVV'	- 他	+ - 他	- なし	- 文頭
ヒシカリヤ ナゴ	+ OVS	+	+ 否定ノミ	+ 動詞語尾 など	- OVV'S	- 他	- 他	+ - V 語尾 ナド	- 文頭
ジャルゴ	- + SVO SOV	- ナシ	- ナシ	- 文頭	- SVO SOV	- 他	? 不明	- 2番目 文頭	- 文頭
バラウゴ	- VOS SVO	-	-	? 不明	- V'VOS SV'VO	-	-	- ナシ	+ ?
現代 ギリシャゴ	- SVO VSO	-	-	- V 前	- SV'VO V'VSO	- +	- + 他	- 文頭	- 文頭
ケクチゴ	- VOS ナド	-	- ナシ	- 文頭	- VOS ナド	-	-	- 文頭	- 文頭

(8) と (10) の結果をまとめると、次の表のようになる。

## (11) 諸言語の分析 (3)

	文核	命題	SM	DM
インドネシア語	－	－：SV'・VO	－	－
フランス語	－	－：SV'・VO	－	－
英語	－	－：SV'・VO	－	－
ジャル語	－	－：SVO ＋：SOV	－	－
ウエールズ語	－	－：V'S・VO	－	－＋
バラウ語	－	＋：V'VOS －：SV'・VO	－	＋？
ケクチ語	－	＋：V'VOS	－	－
タガログ語	－	＋：V'VOS	－	－
タイ語	－	＋：SVOV'	－	＋
中国語	－	＋：SVOV'	＋	＋
ドイツ語（主）	＋	－：SV'・OV	－	－
ヒシカリャナ語	＋	－：OV・V'S	－	－
アパライ語	＋	＋：SOVV'？ －：OV・V'S	－	－
ナバホ語	＋	＋－：SOVV'？	－	＋？
ドイツ語（従）	＋	＋：SOVV'	－	－
ハンガリー語	＋	＋：SOVV'	＋－	－
トルコ語	＋	＋：SOVV'	＋	＋／－
日本語	＋	＋：SOVV'	＋	＋

角田（1991:27）は、従属節と主節の語順について、「これら（従属節と主節＝引用者注）の節の順番についていえば、タイ語と英語では、意味的条件に規制されていて、日本語では文法的条件に規制されているといえる。」と述べている。従属節と主節の関係とは、命題と SM の関係と読み替えることができるので、角田の指摘は以上の結果（タイ語と英語の SM のスイッチー、日本語＋）と対応している。

また、澤田（1993:186）は、テンス制約について、「日本語においては統語論および意味論のレベルで、英語においては意味論のレベルで適用される」と述べているが、テンス制約とは本稿の立場からは命題と SM の関係であると考えられるので、澤田の指摘は以上の結果（英語の SM のスイッチー、日本語＋）と矛盾しない。

角田（1991:27）は、また、「英語の語順について見ると、上で見た従属節



と主節の場合を除いては、語順についての規則が見あたらない。」と述べているが、本稿の分析結果に従えば、上記のような構造的な観点において語順の規則性を見出すことができる。

(11) の分析結果は、(1) でみた文型の言語をほとんど射程においている。したがって、この結果に基づいて、言語の類型を考えることができる。

## 2:2 諸言語の類型（言語類型）

2:1の分析結果は、変数が4あるため、線形の傾斜を持たないため厳密な連続性を見出すことができない。したがって、2変数を2乗した面的な分布において連続性が確定すると考えられる。

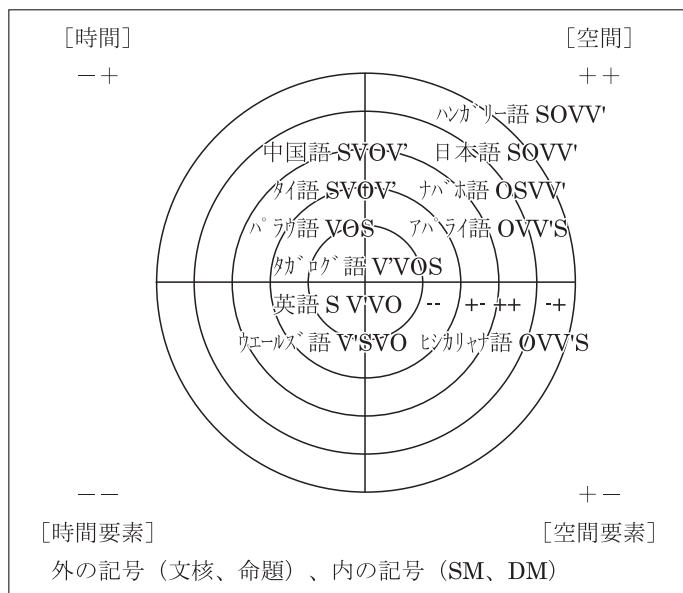
言語の語順のスイッチの特徴をみると、文核と命題に近似的な傾向があり、SM と DM に近似的な傾向がある（たとえば、中国語やアパライ語が顕著である）。そこで、前二者と後二者に分けて、それぞれの近接関係を考える。それぞれのスイッチの組み合わせは、 $(+, +) \rightarrow (-, +) \rightarrow (-, -) \rightarrow (+, -) \rightarrow (+, +)$  というように循環的な近接関係を構成している。

したがって、文核と命題の循環性を横軸にとり、SM と DM の循環性を縦軸にとると、(12) の表を得る。

(12) 言語類型の分布

横：文核、命題 縦：SM、DM	++	+-	--	+-
+-	トルコ語 ハンガリー語 SOVV'			
++	日本語 SOVV'	中国語 SVOV'		
+-	ナバホ語 SOVV'/OSVV'	タイ語 SVOV' パラウ語 V'VOS/SV'VO	ウエールズ語 V'SVO (VSO)	
--	アパライ語 OVV'S/SOVV' ドイツ語（従） SOVV'	タガログ語 VOS ジャル SVO/SOV ケクチ語 VOS	インドネシア 語・英語 フランス語 SV'VO	ヒシカリヤナ語 OVV'S ドイツ語（主） SV'OV (SVO)

これらは、行と列が循環的な分布をしているので、実際はトーラス状（ドーナツの表面）の分布をする。たとえばトルコ語－日本語－ナバホ語－アパライ語のように縦軸を円環にして接合したうえで、たとえばアパライ語－タガログ語－英語－ヒシカリヤナ語のように横軸を円環として接合すればトーラ



スを得ることができる。これは立体図形になるので、トーラスのドーナツを上から見た循環的な平面図を考える。すると、図2を得る。

これは、言語の分布を一貫した基準で分析した結果を、理論的に分類したものである。したがって、これを言語の類型的な分類すなわち「言語類型」とみなすことができる。

## 2：3 言語類型の循環的階層性

2：2で示した言語類型には、次のような特徴がある。

「言語類型」は、図2からも明らかなように、理論的に循環的・連続的に分布している。内側の円環と外側の円環も循環的・連続的に接合している。そしてこのような循環的な関係で諸言語の類型は連続的につながっている。

また、本稿の「言語類型」はトーラス状の分布をしているので、(文核、命題)を循環的に捉えれば、(SM、DM)の分布に階層性がみられ、(SM、DM)を循環的に捉えれば、(文核、命題)の分布に階層性がみられる。したがって、本稿の「言語類型」は「循環的階層性」が特徴として捉えられる。(厳密に言えば、「循環的循環性」というべきであろう。また、言語の循環的階層も

まったく同じ性質を備えている。図1参照。)

## 2:3:1 言語類型の特徴

「言語類型の循環的階層」から、「言語類型」の分布の特徴を示すことができる。

- 1) OV 型言語は、おもに(文核、命題) = (+, +) のレベルで(縦軸にそって)、循環的に分布している。
- 2) OV 型言語では、(SM, DM) = (-, -)、(+, -) のレベルで、OVS 型言語や OSV 型言語などが分布している。
- 3) 諸言語は、(SM, DM) = (-, -) のレベルで(横軸にそって)、循環的に分布している。
- 4) VO 型言語は、(文核、命題) = (-, -)、(-, +) のレベルに分布している。(文核、命題) = (-, -) では SVO 型言語が、(文核、命題) = (-, +) では VSO 型言語がおもに分布している。
- 5) 言語は(文核、命題、SM, DM) = (+, +, +, +) の SOV 型言語と(文核、命題、SM, DM) = (-, -, -, -) の SVO 型言語が両極にあり、安定した特徴を示し、中間に VSO・VOS 型や OSV・OVS 型の言語が分布している。
- 6) 典型的な言語では S が前置し、DM が (-) では S が文中に現われ、OV 型言語と VO 型言語の中間的な言語、すなわち(文核、命題) = (+, -) または (-, +) の言語では S が後置しやすいようである。

## 2:3:2 移動

「言語類型の循環的階層性」には、言語タイプの相互的な関係が反映しているため、次のような言語タイプの「移動」を示すことができる。

- 1) 英語の成立過程における語順の移動

山中(1998:8)は、英語の語順成立の過程について、SOVV' → V'SOV(VSO) → SV'OV(SVO) → SV'VO というかたちで移動をしたとする説(Stockwell 1977)を紹介し「信憑性の高い仮説」と評価している。

これは、表(13)の SOVV'(①?) → P(V'SOV)(②) → ヒシカリヤナ語型(SV'OV/OVV'S)(③) → 英語型(SV'VO)(④)における移動とみなすことができ、本稿の「言語類型」の連続的な変化と基本的に矛盾しない。

しかし、(13)にPで示した言語が今のところ見あたらないことから、場合によっては、②'を経由するコースが考えられる。すなわち、①(SOVV'・

SM + DM +) → ①' (SOVV' · SM + DM -) → ②' (SOVV' · SM - DM -) → ③ (SV'OV · SM - DM -) → ④ (SV'VO · SM - DM -) というコースである。このコースなら、現在ドイツ語がたどっていると想定されるコース(表(13) 参照)と同様であるとみなすことができ、より整合性があると考えられる。

(13) 「言語類型の循環的階層性」と英語の変化

横：文核、命題 縦：SM、DM	++	- +	--	+ -
+ -	①' SOVV' ハンガリー語			
++	① ? SOVV'	SVOV'		
- +	① ? SOVV'/OSVV'	SVOV'/V'VOS/ SV'VO	V'SVO (VSO) ウエルズ語	② P (V'SOV) 存在しない？
--	SOVV' (②') ドイツ語 (従)	SVO/SOV/ V'VOS	④ 英語 SV'VO	③ SV'OV (SVO) ドイツ語 (主節)

2) 個別言語内での語順の移動

個別言語内でも1) と同様のことがいえる。

インドネシア語の主観態・客観態では次のように SVO → VSO · OVS の移動が行われる。

(14) 主観態：Ia membaka koran. (彼が新聞を読む：SVO)

(15) 客観態：Dibacanya koran. (新聞を彼は読む：VSO)

(16) 客観態：Koran dibaca. (彼は新聞を読む：OVS)

さらに、転換詞による移動現象がある。

インドネシア語では、転換詞「oleh」を用いて、SVO → OVS → SOV の移動が行われる。

(17) Buku ini dapat dibaca oleh siapapun juga. (この本は誰にでも読める)

(18) Oleh siapapun juga buku ini dapat dibaca. (誰にでもこの本は読める)

タガログ語では転換詞「ay」を用いて、VSO → SVO の移動が行われる。

(19) Bumasa siya ng libro. (彼 (女) は本を読んでいた)

(20) Siya ay bumasa ng libro. (= Siya'y bumasa ng libro.)

これらは、(SM, DM) = (-, -) のレベルで水平に、移動する現象の例といえる。

1) や2) の例は、いずれも「言語類型の循環的階層性」と矛盾せず、本稿の分類の正当性を証明するものとなっているといえる。

### 3 言語類型と認知的シェーマ

#### 3:1 言語類型の循環的階層性と言語の分布

「言語類型の循環的階層性」は、言語の文型の分布と数量の点でも反映している。

本稿の「言語類型の循環的階層性」を横軸にそって左から右にたどって、(SM、DM)の組合せの数をしめすと、4、3、2、1となる。一方(1)からこれらに該当する文型の言語数を数えると、43、33、33、2となる。さらに、中国語が従来SOVに入れられていたことから、修正すると、41、34、32、2となる。母集団が限られているので、確定的なことはいえないが、(文核、命題)の組み合わせによる分類は、モダリティーを考慮に入れなければ、命題の「安定度」とでもいえる傾向をこれから読み取ることができるだろう。そして、左から右にかけて順番に減少しているとみなすことができるといえるのである。以上をまとめると次の表のようになる。

(21)

文核、命題	++	-+	--	+-
文核と命題の型	統語・架橋型	意味・架橋型	意味・接続型	統語・接続型
本稿の分類の主な文型	SOVV' OSVV' など	V'VOS V'VSO など	SV'VO など	OVV'S など
モダリティーの組合せの数	4	3	2	1
(1)の分布	43	34	32	2
命題の安定度	大	中	小	最小

以上から次のような関係性を観察することができる。

(22) 統語型言語の傾斜: SOVV' (OSVV') (+, +) > OV V'S (+, -)  
(逆転) | |

意味型言語の傾斜: V'VOS (V'VSO) (-, +) > S V'VO (-, -)

従来、文型はS・O・Vの要素から単純に順列を考えて分類してきたが、「言語類型の循環的階層性」の観点からは、4つの文型に分けられることを示している。いいかえれば、主語と目的語が連続する言語の場合には、主語と目的語は逆転しやすい(日本語、タガログ語など)ように、SとOの語順は比較的入れ替えが可能だが、述語(VV' = V)の位置は変わりづらいといえる。

また、各傾斜の前者と後者の各項は対応した形で、逆順になっている。すなわち、OV型言語とVO型言語は、位相的に逆転しているとみなすことができる。これは0:2の仮説の証明となる。

### 3：2 言語類型の循環的階層性と認知的シェーマ

3：1の(22)の関係性は何を意味しているのだろうか。

いま、仮に、(文核、命題)の組み合わせについて、次のようにA、B、C、Dと名前を与える。(表の順番に注意)

横：文核、命題	+-	++	-+	--
文核と命題の型	統語・接続型	統語・架橋型	意味・架橋型	意味・接続型
本稿の分類の主な文型	OVV'S	SOVV' OSVV'	V'VOS V'VSO	SV'VO
	B	A	C	D

1) まず、全体が「文核」の特徴にしたがって、統語型の(A、B)と意味型の(C、D)に分けられる。語順を見ると、完全に反転(逆転)している。  
 2) 次に、命題形成の特徴として、AとCは、架橋型で有機的に全体がまとまっている。一方、BとDは、接続型で{OV/VO}と{SV'/V'S}が各部分に分割して形成されている。また、AとCは、主語と目的語が述語の片方にまとまっているのに対して、BとDは、主語と述語が述語をまたいで分離している。これは、命題の関係項(補語)を全体として見る言語と、分離して見る言語の相違を表していると考えられる。

1)と2)から、「A：B  $\cap$  C：D」の関係が成立する。

ここで、1)から、統語型の(A、B)と意味型の(C、D)とを結びつけ、かつ、語順においても反転させているという点で、いわば両者は鏡像の関係にあり、「 $\cap$ 」を「メタファー」の関係として見ることができる。

また、2)からA、Cは全体が統御された命題と考えられるのに対してB、Dは部分の集合と考えられるので、「：」は全体と部分(の集合)の関係を示しており、「メトニミー」の関係として見ることができる。

以上をまとめると次のようになる。

(23) 言語類型と認知的シェーマ (1) 文核・命題

	意味型		統語型
	時間	メタファー	空間
架橋型：全体	V'VOS	(逆転)	SOVV'
メトニミー			
	時間要素		空間要素
接続型：部分	SV'VO	(逆転)	OVV'S

これは(7)の「認知的シェーマ」に完全に重なっている。

(SM、DM)の組み合わせについても、同様に考えることができる。

「言語類型の循環的階層性」を縦軸にそって、(文核、命題)の組み合わせの型の数をみると、順番に1、2、3、4になっている。これは、(SM、DM)の連続的な分布を表していると考えられる。

一方、モダリティー全体において定義上((9)参照)、

- 1) SM は、文核の機能と同様に、統語型(+)か意味型(-)かを定める。たとえば、文核 OV 型で V が後置するのと同様に、「疑問の印」は後置し、文核 VO 型で V が前置するのと同様に、「疑問の印」は前置する。
- 2) DM は、命題構成要素の機能と同様に、文の全体的な構造に繰り込まれる(+)か、独立して接続する(-)かを決定する。たとえば、命題 S [OV] V' 型で S・V' が架橋型で統語を重視するのと同様に、WH 疑問詞は平叙文型になり、命題 SV' [OV] 型で S・V' が接続型で意味を重視するのと同様に、WH 疑問詞は前置型になる。

したがって、言語類型の機能において、「文核」と「SM」、「命題」と「DM」で、似た働きをするといえる。(そして、逆は言えない。たとえば、「文核」と「DM」の間に相似の関係は読み取れない。)

したがって、以上をまとめると次のようになる。

#### (24) 言語類型と認知的シェーマ (2) SM・DM

	意味型		統語型
	時間	メタファー	空間
架橋型：全体	(SM-, DM+)	(逆転)	(SM+, DM+)
メトニミー			
	時間要素		空間要素
接続型：部分	(SM-, DM-)	(逆転)	(SM+, DM-)

これは、モダリティーの自由度を表しているといえるので、逆に、語順の拘束度を示しているといえるのではないだろうか。たとえば、(SM-, DM+)のウエールズ語の語順はほとんど変えられない。また (SM-, DM-) に属する英語は一般に語順重視といわれているのに対して、(SM+, DM+) の日本語は補語の語順を比較的自由に変えることができる。また、(SM+, DM-) に属するハンガリー語も、日本語程ではない (DM の位置すなわち疑問詞の位置は決まっている) が、比較的自由である。

これも (7) の「認知的シェーマ」に完全に重なっている。

この結果は、「言語類型の循環的階層性」(「言語の型」と「モダリティーの組み合わせ」)がいずれも「認知的シェーマ」にしたがっていることを示している。

### 3:3 認知的シェーマ

鈴木（1996）（1997）（1998）（1999）による、言語に関する一連の分析を「認知的シェーマ」の観点からまとめると次のようになる。

#### （25）言語活動と認知的シェーマ

横：認知的シェーマ 縦：記号空間	空間	空間要素	時間要素	時間
名詞	4動体	3動物	2人間	1人格
	5空間	6事物	7現象	8時間
状況補語	空間 (場所)	空間要素 (手段)	時間要素 (様態)	時間 (時間)
格助詞	デカラニガ	ガニカラデ	ニトカラデ	ヲ
補語	主語	目的語3	目的語2	目的語1
述語の格枠組み	ガ	ガガ	ガニ	ガラ
述語の意味 自動詞 他動詞	1A 状態 1B 能力	2A 関係 2B 追求	3A 変化 3B 動作	4A 移動 4B 達成
言語	命題	SM	DM	文核
	A'A	B'B	C'C	D'D
発話	Ⅱ即他文	Ⅲ即自文	Ⅳ即自対他文	Ⅰ即他对他文
言語類型 +：統語型 -：意味型				
(文核、命題)	(+, +)	(+, -)	(-, -)	(-, +)
主な文型	SOVV' (OSVV')	OVV'S	SV'VO	V'VOS (V'VSO)
(SM, DM)	(+, +)	(+, -)	(-, -)	(-, +)
主な言語	日本語	ハンガリー語	英語・タガログ語	ウエールズ語
語順の自由度	大	中	小	最小

名詞の分析から着想された「認知的シェーマ」という仮説は、このように「言語活動 (langage)」のあらゆる水準に見出されるといえる。ということは、逆に、「言語活動」は、「認知的シェーマ」の多様な反映とみなせる可能性があると言える。

### 4 結論

「言語の循環的階層性」によって、世界の諸言語を類型として連続的・循環的に分類することができた（「言語類型の循環的階層性」図2）。そして、「言語類型の循環的階層性」によれば、OV 型言語と VO 型言語は対称性をなし



ていることから、「言語の循環的階層性」は OV 型言語の循環的階層性を1つ想定すればよく、その逆転・移動したものが VO 型言語の循環的階層性であるとみなすことができる。したがって、「言語の循環的階層性」は普遍文法(UG)の中核的要素と言えるであろう。

また、「言語類型の循環的階層性」は、(文核、命題)と(SM、DM)の各組み合わせにおいて「認知的シェーマ」に基づいていることが示された。そして、名詞から言語類型にかけて一貫して観察される「認知的シェーマ」に関して、〈「言語活動」は「認知的シェーマ」の多様な反映とみなせる〉ことの可能性が提示された。

「認知的シェーマ」がどうして言語活動の基盤にあるのかという問題が課題として残された。

#### [参考文献]

- バーナード・コムリー (1989: 1992)『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房  
 角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』, くろしお出版  
 南不二男 (1993)『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店  
 澤田治美 (1993)『視点と主観性』, ひつじ書房  
 中右実 (1994)『認知的意味論の原理』, 大修館書店  
 郡司隆男 (1994)『自然言語』, 日本評論社  
 大津由起雄 (1995)「言語の心理学」, 『岩波講座認知科学7言語』, 岩波書店  
 山中桂一 (1998)『日本語のかたち』, 東京大学出版会  
 鈴木互 (1996)『文核要素と認知的シェーマ』, 96年度名古屋大学大学院国際開発研究科研究生論文 (未刊)  
 鈴木互 (1997a)「日本語における名詞の階層性と認知的シェーマ」, 『インドネシア日本語教育学会 予稿集』, パジャジャラン大学 pp1-15  
 鈴木互 (1997b)「格助詞の階層性」, 『平成9年度日本教育学会秋季大会 予稿集』, 日本語教育学会 pp27-32  
 鈴木互 (1998b)「発話の循環的階層性」, 『間接性発話を持つ文脈の意味の語用論的分析及びその結果の日本語教育への応用』, 97年度文部省科学研究費補助金基盤研究 C-2 (課題番号09680299) 研究成果中間報告書 pp5-36  
 鈴木互 (1999)「言語の循環的階層性と諸言語の循環的分布」, 愛知女子短期大学紀要第32号 pp115-131  
 鈴木互 (2000)「発話の循環的階層性」(改訂版), 『間接性発話を持つ文脈の意味の語用論的分析及びその結果の日本語教育への応用』, 97年度文部省科学研究費補助金基盤研究 C-2 (課題番号09680299) 研究成果最終報告書 pp5-36